
ヘヴィーメタル七福神

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘヴィーメタル七福神

【Nコード】

N8743P

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

どん底の日本経済を救うべく招来された七福神はなんと……タイトルでネタばれしている通りヘヴィメタバンドを組んでいた。しかしバンドはメンバー間の確執によって解散の危機を迎えていた。果たして七福神バンドは結束を取り戻し至福のサウンドを鳴り響かせることが出来るのか！？……よろしく願いしますよぉ〜。

01、ロックンロール

時に西暦201X年、日本は未曾有の不況に喘ぎ国家存亡の危機に陥っていた。

この絶体絶命の危機を救うべく政府は極秘裏に超法規的経済振興策を実行に移そうとしていた。

急げ！政府！日本が債務超過で国家破綻するまであとわずか！

201X年師走。

東京都台東区は浅草寺において七福神を召喚する密教の秘密儀式が執り行われていた。

ありとあらゆる経済政策に失敗に失敗を重ねてきた日本政府の他力本願の極み、伝説の七福神を現世に呼び寄せて福を招いてもらうという作戦である。ちなみになんでこれが超法規的施策かというと、日本は政教分離で政府は宗教行事にお金を出してはならないからである。よってかかる諸経費は内閣官房費より充当されていた。護摩壇が焚かれ、祝詞が読まれ、政府関係者が固唾をのんで見守る中ついに日本国起死回生の秘密作戦が敢行された。

朗々と上がる祝詞の声、弾けるオレンジの炎。空海以来1200年日本密教最高の秘技によりついに堂に黄金の光が満ち、思わず目をかばうまばゆさの中から宝船に乗った七人の神が影を現した。

ドコドコドコドコドコドコ……と太鼓のような雷鳴がとどろき、ギョウワアアア……と空を軋ませる暴風が吹き荒れ、ついに、

天上の女神の声が降ってきた。

時空を超えてやってきたあああああ~~~~~

七福神がやってきたあああああ~~~~~

おおっいえええ~~~~！

ー

二人の美人、いや美神が黄金のマイクを握りしめてシャウトしている。ううなんと眩しい御姿。かぶりつきで見上げたいけれど眩しすぎてまともに見れないぞ。眩しく輝く七人の神たちは、金銀の折り紙で折ったようなコスチュームを身につけ、宝船に装着された回転ビームライトをディスコのミラーボールのように反射している。

すさまじき音響にいつしか祝詞の声は消え、日本全国より集められた高僧たちも政府関係者たちも口をあんぐり開けてヘヴィーメタリックな七福神の圧倒的パフォーマンスを見守った。

炸裂するパワー、

痺れるドライブ感、

ヴォーカルは炎より熱く、

ギターはナイフより鋭く、

ベースはまるで地震のごとく、

ドラムは稲妻よりも激しく！

(? W P C R 1 0 3 3 ヴァン・ヘイレン「炎の導火線」)

二人の女性ボーカルは金切り声がすさまじく、世俗に疎い高僧たちとこの手の音楽にとんと免疫のない政府高官たちはなんとわめいているのかさっぱり聞き取れず、そうこうしている内に

ジャンジャンジャア~~~~~ン、

「イエイツ！」

ジャ~~~~~アンツ。

と一曲終わった。

神たちの見下ろす観客席で拍手したのは若い下っ端職員一人だけだった。

02 ホワイト・ルーム

ノリの悪い観客席を見下ろし、お目目パツチリのアイドル顔の女神が突然不機嫌な顔になりバックバンドを振り返った。

「なによこの会場？ わたしもうこんなドサ回りうんざりよ」

下ぶくれでふにやつと目の笑ったベースをかかえた……恵比寿がなだめた。

「ごめんよ弁天ちゃん。あれ〜？おつかしいなあ〜？ 今日が高天原ドーム球場で演奏の予定だったんだけどなあ〜？ ここ、どこ？」

ふにやつと笑った目が細く開いて小さな黒目がじろつと睨み、官房長秘書はうつとびびり、

「お、おまえなんとかしろ！」

と一人だけ拍手した若い秘書を前に押し出した。

首相の再チャレンジ政策の見本でなんとなく採用されてしまった元期間従業員の若者……秘書その5は戸惑いながら七福神らしき者たちに尋ねた。

「あのー、皆さんは七福神様たちでいつらしやいましょうか？」

「そうだよー。僕たち七福神だよー」

「だそうですよ？」

と若者は秘書長官を振り返ったが、もつとちゃんと聞け！と前を向かされた。

「あのー、皆さん、その姿は？……」

女性2人男性5人の七福神は、形こそおめでたい宝船の絵で見るとおりの昔風の衣装を着ているが、材質がキラキラのメタメタの、実にヘヴィーメタリックな輝きを放ち、エレクトリックな楽器を携えている。

「かつこいいでしょ？」

「はい！」

元ロック少年の若者は両手を握りしめて返事をした。

「いやあ、ドコドコ言う太鼓のグルーヴが最高っすねえ！」

ドラムスに囲まれてどつかと座った黒い顔の……大黒天が「フツ」と渋く笑った。恵比寿は上機嫌でうんうんうなずいた。

「だよねえ？」 僕もオヤジの叩き出すリズムって最高だと思っただよねえ。僕もさー、ズンズンズン！って合わせてベース弾いてるとムラムラ燃えて来ちゃうんだよねえ」

「いやあー、それにツインギターがかっこいいっすねえー!!」

トゲトゲのよろいをまとった……毘沙門天がイケメンを当然だと言っようにつんとすまし、

頭の長い……福祿寿？がニコニコ赤ら顔で「ギューイ〜ン」とエレキギターをかき鳴らすサービスをした。

「キーボードも壮大で世界が宇宙まで広がってっちゃいますねえー」 腹が思いつきりメタボな布袋が「パ、パ、パ、パ、プア〜ン」と「未知との遭遇」を演ってフレンドリーさをアピールした。

「女性ボーカルがまたー……………」

と、ここで無知で学のない若者は首をひねった。

「弁財天が……二人？」

アイドル顔の方が「へっ」と馬鹿にした笑いを浮かべてもう一人を横目で見て、馬鹿にされた方の目が切れ長のお姉さんタイプの美人が暗い怒りを押し隠して視線を逸らした。

変なところで学？のある若者はピーンときた。

これは、「フロントとしてどっちに華があるか？」で反目し合う「ゴーゴーズ」や「フリートウッドマック」に見られた「女の争い」型の内紛である！と。

しかしこのバンドの場合勝負は明らかかなようで、アイドル顔の方がキャピキャピかわいいし、さっきの演奏ではメインの歌詞はほとんどこっちが歌ってたし、もう一人は「うっう〜」とか「あああ〜」とかうなっていただけだった。

アイドル顔が前に出て意地悪に訊いた。

「わたしがかわいい弁財ちゃん。それでは問題でえーす。あっちの、

年上の、お姉さんはいったい誰でしょう？」

ニヤニヤ笑いながら「チツチツチツチツ」と秒を刻まれて若者は「え〜とえ〜と」と悪い頭を振り絞り、もう一人の美人の冷たい視線を受けて脂汗を流し、

「チツチツチツ。ハイ残念、タイムアップ……」

「ハイ！」と眼鏡を掛けたアシスタントの若い僧が手を上げ「吉祥天様」

と答えた。クールビューティーの吉祥天はつんとしながらもちよつと嬉しそくに唇をゆるめ、若い僧は思わずポツとなった。アイドルの弁天はじろつと不機嫌そうに僧を睨み、

「せいかい……」

と面白くなさそうに言った。

面白くない弁天だが……何か思いついてニヤリと笑った。

「へえ〜。キツチョー姉さんも、一部では、メジャーじゃないの？
だったらさあー、やっぱあたしがいらんないよねえ〜？」

恵比寿が慌ててとりなした。

「弁天ちゃあ〜ん、駄目だよお、そんなこと言っちゃあ〜。僕たちのバンドには絶対に弁天ちゃんの力強いボーカルが必要なんだからあ〜ん」

すると吉祥天がボソツと、

「……じゃやっぱりあたしがいらんないんだ」

と言い、

「吉祥さあ〜ん……」

と恵比寿はほとほと困ってしまった。そんな恵比寿やバンドメンバーをイライラしながら眺め、弁天は言った。

「マジでさあー、わたし、いいじゃん？ ううう〜、とか、あああ〜、とか、盛りのついた猫みたいになっただけの歌なんてさ、わたしが歌う意味ないじゃん？ マジ、うんざりなんだよね。ぜんっぜん、面白くないわけ」

「弁天ちゃん。弁天ちゃんのボーカルがなかったらそれこそ全然面白くないよお。」

弁天は「フンッ」とバンド内に刺々しい空気を振りまきつつ、宝船の縁から身を乗り出して秘書その5にニコニコしながら言った。

「あなた、わたしの新バンドのマネージャーになってよ?」

「ぼ、僕がマネージャーですかあ?」

若者は学生時代ちよびつと夢見ていたきらびやかな芸能ビジネスの世界に『今の仕事より向いてるだろうなあー…』と、冷やかな秘書室の空気を思い出して思った。

「いや、でも僕なんか……」

と口先だけ否定しつつ反応を見ようかと姑息な態度を取ると、ドン!と背中を押され、秘書長官が怖しい顔で睨んでいた。低い声で『なに嬉しそうに話し込んでるんだ、馬鹿! なんて七福神がこんなうるさいロックバンドなんてやってんだよ? と言うか、本物の神様なのかよ、この人たち?』

「こらこらこらあ。神様は、ジ・ゴ・ク・耳、なんだぞお?」

と弁天がニヤニヤして長官を慌てさせた。

「そうよね、あんたたちなんでロックバンドなんてやってんの? はっきり言つて、変、よ?」

と、それを捨てぜりふに弁天は船から飛び降り、

「行くわよ、マネージャー!。新メンバーでバックバンド組んで、全国ドームツアーに出発よ!」

と、堂の扉を開け放ち、夜明けの境内へ歩み出たのであった。

「さあ、レジェンドの始まりよ!」

03 タトウ・ユイ

弁天はギター（？）四天王の一人持国天をスカウトし、以前から親交のあった「ザ・宗像三女神（むなかたさんじょじん）」を玄界灘から呼び寄せて新バンドを結成。大手レコードと契約して鳴り物入りでCDデビューした。（ザ・ゴスミックス・弁天・バンド「ゴスロリ、ビジュアル系を歌う」）

このデビューシングルは

「『ゴスロリだけど本格派よ?』とキュートなボーカルで歌われるポップチューン。ポップなメロディーにミスマッチにゴシックなオルガンやベースがおどろおどろしく響き渡り、ハードなギターソロが炸裂する、頭メロメロの摩訶不思議なカラフルポップンロック。今聴かなきゃ駄目なのはこれ!」

とFM局でヘヴィローテーションのヒットとなる。大型CD販売店でのミニイベントも盛況で、フルアルバムの制作も進み、大手プロダクションのバックのない無名の新人としては異例の東京ドーム5日間連続公演も決定した。

さて。

七福神を呼び出してはみたものの、訳の分からないヘヴィメタバンドなんかに成り果てていた神様たちを持て余し、とりあえず若くて順応性のありそうな眼鏡の見習い坊主に世話を一任して、全国各地から集合した高僧チームは解散、それぞれの寺に帰り、内閣官房秘書官たちも公邸に帰り善後策を講じることになった。

宝船は大黒天の打ち出の小槌で小さくしておしゃれな街の十番稲荷神社に係留させてもらって、ふつうの（それでもかなり派手だが）衣装になってもらった神様たちとのんびり浅草寺境内のベンチに座って鳩を眺めながら眼鏡坊主の百遍（ひゃっぺん）はおそれ多くも

神様たちに「トップランナー」のようにバンド結成の秘話を聞いたのだった。

バンドのリーダーの恵比寿（ベース）が主に語った。

恵比寿「たしかにね、元々弁天ちゃんのために始めた音楽活動だったんだよね。ほら、弁天ちゃん、元々琵琶弾いてて、歌も踊りも上手いから。なにしろ芸能の神様だからねえー。僕ら七福神って言っても、宝船に乗って釣り竿だの小槌だの団扇だの振ってニコニコしてるだけでしょ？ つままないじゃないの、ねえ？」

「なるほど。ところが当の弁財天さんがバンドに不満を持つてるわけですね？ 何が気に入らないんでしょう？」

恵比寿（「どうせわたしが嫌いなんでしょう？」とすねる吉祥天を「そんなことないよお」となだめながら）「そうなんだねえ。僕たち元々弁天ちゃんを盛り立てるために楽器を始めたんだけど、なんというかその、音楽やるのが面白くなっちゃったんだよね？」

布袋（キーボード）「そうだなあ。最初はもつとクラシカルなものをやってたんだよね？ 楽器も生楽器でさ、わしなんかプア〜プア〜って昔の小学校にあったオルガン弾いてたもんな。女子十二楽坊？ あんな感じだったかなあ？」

福祿寿（ギター）「ハードになってったんは毘沙門と大黒のせいじやろうが？ わしやジジイじゃからな、けっこうしんどいんじゃない？」

毘沙門天（ギター）「じいさんだって毎度酔っぱらってノリノリで弾きまくってるだろう？ ……まあ、俺たちがハードにしていたのは否定できんがな」

大黒天（ドラムス）「つい、熱くなってしまってな」

福祿寿「昔のやんちゃな血が騒ぐんじやろつて。なにしろこいつら若い頃は相当の武闘派じゃったからのう」

ー「はあ……。それで……。吉祥天さんは？ 最初からメンバーだったんですか？

吉祥天（ボーカル）「…別に」

ー「……………」。

（気まずく重苦しい空気が流れ、クールな毘沙門天が説明的に説明した）

毘沙門「元々は吉祥天がオリジナルメンバーで、その頃は別にバンド活動をしていたわけじゃないんだ。途中から弁財天が入り浸るようになって、キャラのかぶる吉祥天が抜けたんだ」

ー「ああ、そういう過去の確執もあったわけですねえ。あわわ…（メンバーの冷たい視線に慌てて口をつぐむ）

恵比寿「そうだね。弁財ちゃんが入ってバンド活動を始めたんだけど、吉祥姉さんにも僕らが頼んでメンバーになってもらって戻ってもらったんだよ。ほら、寿老人の分、穴が空いちやうから」

ー「ああ、そうなんですな。寿老人さんと福祿寿さんは元々同じ神様ですものね？ 朝鮮から日本に渡るときの入国審査で別人と勘違いされてダブっちゃったんですよね？

福祿寿「そういうことじゃ。稲荷とか狸々とか入れてクレイジーキヤッツにしようか？つてな話もあったんじゃがな、やっぱり華やかな方がええじゃろう？」

「ーそつですよねー！ 吉祥天さん、お美しいですものねえええ〜！？」

吉祥天「……………」（まんざらでもない様子）

恵比寿「だよねえ？ イケメンの毘沙門さんと美形兄妹だよねえ〜？ うちの三枚看板の二枚だものねえ〜」

毘沙門「弁天はそれがまた気に入らねえんだよな。あいつ、目立ちたがり屋だから」

布袋「大衆的な知名度は圧倒的に弁天の方が上なんだからいいのになあ？ あつ、吉祥天ちゃんはセレブなスーパーモデルだから、元々ファン層が違っただよ」

吉祥天「…どうせ、わたしなんか、弁天と間違われて、『え？ 違うんですか？ じゃあ、鬼子母神さん？』なんて言われるのよ？ まったく、失礼しちゃうわ」

布袋「まあまあ。そんなのはワイドショーの芸能ネタしか知らないおばさん連中だから」

吉祥天「わたし、別に、音楽とか得意じゃないし。どうせ、数合わせの補欠だし」

一同「……………」

――あの――、それで皆さん、これからの活動予定は？ 呼び出しておいて申し訳ないんですが、天界に帰られますか？

恵比寿「それは駄目だよお、僕たち曲がりなりにも神様だものね。出てきたからには福を撒いてあげなくちゃ、メンツに関わるよ」

――じゃあ福を撒いてくださるんですか！？

恵比寿「そうだよ。ちゃんとライブやらなくちゃ」

――……ライブ……ですか？

恵比寿「うん。武道館！……とは言わないけどさ、君、ライブ会場押さえてよ？ 僕ら宝船でどこでも行けるから、人が集まれる場所ならどこでも出張してあげるよ？」

――……それは、ありがとうございます……。政府の人に言ったら喜びます。……多分……。。

恵比寿「うん。よろしく頼むよお。盛り上げるからねえ！」

04 ピッグ・オン・ザ・ウイング

201X年、日本の商店街は壊滅の危機に瀕していた！ さび付いたシャッター街が勢力を広げ、かろうじて生き残っている個人商店をすべて飲み込もうとしていた！

ここはとある地方のアーケード街である。往時華やかだった中心街も人通りは年々減少し、大手専門学校グループを誘致して生き残りを模索していた。

昼休み、総菜屋の肉団子弁当を買った映像系専門学校生は

「はい、大当たり〜！」

とお弁当といっしょにソースの染みた一枚のチケットを渡された。

「え？ なにこれ？」

「有名なロックバンドなんじゃないのかい？ おばさん聞いたことないけどねえ？」

学生はチケットのバンド名を見て、『知らねえなー』と思った。

「これ、何百円か買い物するもらえるの？」

「ああ、いくらでもいいよ。なんならお友だちの分もあげようか？ 商店街の振興につて会長さんが配っていったんだけどね？」

「ふうーん。じゃあオレ、学校で友達に宣伝してあげますよ。弁当買いに来るように」

「おやありがたいねえ〜。弁当貸して。肉団子一つおまけしてあげる」

「あ、ラッキー。へへへ、いただきまーす。じゃ、本当に宣伝しますよ」

「よろしくねー！」

と、肉団子一つとよく分からないロックバンドのライブチケットをおまけにもらった学生はさっそく最近始めたTwitterでつぶやいてみた。ちなみになんでそのバンドがロックバンドである

と分かったかというところ、バンド名で名乗っているからである。

「 ザ・ロック・福神 」

と。

201X年。学生たちの生活も困窮していた。以前は遊興費に充てられていたバイト代は日々の生活費に充てられ、憂さ晴らしのカラオケ代にも事欠く苦学生が激増していた。

そんな彼らによく分らない……おそらく地元商店街のおじさん連中が結成した素人バンドであろうが……そんなものでも数少ないエンターテインメントとして見に来る若者がけっこういた。

しかし会場に集まった彼らは困惑した。会場として指定されていたのは護国神社の広い境内だった。どこかに夏祭りのようなステージがあるのかと捜したが見当たらない。夕刻の境内をいったいどこに見に行けばいいのかわからずうろついていると、表の道路に大型トラックの荷台に載って派手な宝船が現れた。

宝船の胴にまるで砲筒のように仕込まれたスピーカーを通して、ドカドカドコドコドン！と雷のような太鼓が打ち鳴らされ、

ギユワワワアア~~~~ン！とツインギターが吠え、

ドッドッドッドッドッ、と重低音のベースが地鳴りのように響き、

パパパパパア~~~~ンウンニユアア~~~~ン、とシンセが甲高くねじれ上がり、

ダダダダダン、ダダダダダン、とヘヴィーなりフの演奏が始まった。

若者たちは思いがけず本格的な演奏に度肝を抜かれ、宝船の周りに殺到し、遠くからは「あっちだあ！」と駆けだした。

すると宝船はトラックの荷台から浮き上がり、境内上空を飛びながらバカテクの演奏を繰り広げた。若者たちは拳を振り上げて喝采し、爆音のようなインストウルメンタルをバックに縁に片足かけた超美麗な女性ボーカルが

「・・・・・・・・・・」

……まあなんと云ってるのかまったく分からないしほとんど聞こえないが、とにかく若者たちは熱狂した。

1時間ほどの演奏が終わり、宝船が空のあなたに消えていこうとすると、

「アンコール！ アンコール！」

と大合唱が起こり、船が戻ってくると「うおおーっ！」と歓喜の怒号がわき起こった。

2度のアンコールに応え、夜空に打ち上がった花火の向こうへ、今度こそ宝船は去っていった。

いやあー…………、良かったなああー………………、と、

幸運にもそこにいた若者たちは熱狂さめやらぬ面もちで仲間同士感想を言い合い、さっそく携帯電話であちこちに自慢を始めた。

次のライブはどこだ！？

ネットにチケットの配布情報が現れると近隣はもとより、全国各地からロックファンが噂のバンドのチケットを求めてその商店街に殺到した。ロックなんかにはまるで無縁の店主たちは訳の分からぬままお客にチケットを配布し、とにかく降って湧いた好景気に嬉しい悲鳴を上げた。

空飛ぶヘヴィーメタルバンド「ザ・ロック・福神」は全国各地でライブパフォーマンスを繰り広げ、一部頭の固い良識派の大人から騒音被害を訴えられたりはしたが、全国の若者たちを熱狂させ、往年のファンのロック親父たちをも取り込んで大フィーバーを巻き起こした。

著名なロック評論家、「ヘヴィメタゴッド」こと伊藤 則氏のライブ評である。

「『ザ・ロック・福神』の全身全霊を打ち込むライブ・パフォーマンスに僕は衝撃を受け『これぞ本物のロックのライブだ！』と興奮のあまりネクタイを引きちぎってしまった。会場はマグマのごとき熱さに飲み込まれ、空を見上げる目撃者はロックの原始的なエネルギーに満ち溢れた演奏に口をあんぐりと開け、ただひたすらにすさまじき音のパンチを浴び続け、そして、ノックアウトされたのである。しかし観客は何度ノックアウトされても立ち上がり、もつとだ！もつとだ！とパンチに酔ったようにもつと激しいビートを、リフを、求め、そして彼らパフォーマーは見事にそれに答え、そして僕らは、完膚無きまでにノックアウトされたのである。地面に大の字で倒れ込んだ僕らをあざ笑うように彼らは優雅に空のかなたに去っていった。静かになった会場で、僕らは今日撃したことが現実であったのかしばし我が目を、耳を、疑った。事実は幻であったのかもしれない。しかし会場に詰めかけた何百という観客が、同じ幻にノックアウトされたのである。僕らは皆同じ熱を感じ、腕を振り上げ熱くシャウトしたのである。この素晴らしい幻を、何度でも味わいたいと思う。次のライブ会場にも僕は足を運ぶだろう。そして何百何千のパンチを浴びて、また夢心地でノックアウトされるだろう。

………女性ボーカルが弱いのがちょっともつたいない」

05 生きながらブルースに葬られ

「ザ・ゴスミックス・弁天・バンド」のデビューフルアルバム「サラニスバラシイ」はチャートの1位を独走し、ミリオンに迫る売り上げを叩き出していた。

絶好調のバンドは、

そしてアルバムに伴う東京ドーム5日間公演だが、そのリハーサルが始まってじきにバンド内に亀裂が生じた。

弁天のバックバンドを務める三女神はそれぞれ芸達者で以前より「ザ・宗像三女神」として活動していたが、単なるバックバンド扱いする弁天と反目が生じ、リハーサル中、音の調整に手こずるバンドに対し

「音なんてどうでもいいのよ。お客が聴きに来るのはわたしの歌でバックの演奏なんて誰も聴きやしないんだから！」

と言い放った弁天の言葉について「ブツツン」と切れ、バンド脱退を決意。しかしレコード会社との契約でコンサートには参加せざるを得ず、バンド内は殺伐とした空気が漂った。

もう一つ悪いのが、演奏に力強いアクセントを付けるために招いた持国天であるが、これがバカテクのギター演奏はもちろん、色白のビジュアル系で、同じ四天王の毘沙門天にも負けないイケメンだった。ウケを狙ってどんどん衣装が派手に、薄着になっていく弁天が持国天にはべたべた甘えて、三姉妹のひんしゆくを買っていた。

チケットは5日間とも完売し、初日の公演がスタートした。

バンドはまだアルバム1枚しか持ち歌がないため、「ザ・宗像三女神」が前座として自分たちの曲を披露した。シンセ主体の幻想的な曲が多く、ポップなパフォーマンスを期待していた多くのお客には退屈に思われたが、音楽性は高く、ちゃんと聴き入るお客もいた。そして弁天が登場してメインの「ザ・ゴスミックス・弁天・バン

ド」の演奏が始まるはずだったのだが……、

前座を終えた「ザ・宗像三女神」は演奏を放棄してさっさと楽屋に帰ってしまった。観客同様最初何が起こったのか分からず呆然としていた弁天だったが、メンバーの造反に思い至ると激怒し、だったらかまうものかと、元々琵琶の腕前は拔群だったので自らエレキギターを持ち、持国天とのツインエレキギターのみという変則的なデュオ形式で演奏を始めた。二人ともギターの演奏は素晴らしく上手いのだが、リズムのない演奏はやはりダレる感じがして、しかもこちらもけっこう目立ちたがり屋の持国天がちよくちよく前に出てアドリブのソロ演奏をかますので、イケメンにデレデレしていた弁天もイライラを募らせていき、とうとうギターを床に叩きつけ、アンプに叩きつけ、火花を散らしてショートさせ、「ガンッ」と会場の電気をすべて落としてしまい、ざわつく会場をそのままに、ぶつた切りでコンサートを終了してしまった。

当然翌日のライブ評は最悪だった。

あれから怒鳴り合い、つかみ合いのケンカをした弁天と宗像三女神は完全に修復不可能に仲違いし、契約を履行するためにのみ、別々にステージに現れて演奏した。弁天と気まづくなった持国天は宗像三女神の方に客演し、幻想的な曲にギターの音色が気持ちよく伸びて、これは思いがけず良い化学反応を生んでお客さんの反応も上々だった。

一方弁天が登場すると、

彼女はギター一本で弾き語りのフォーク形式を取らざるを得ず、これはすっかり派手になってしまったポップな曲スタイルにはまるで合わず、途中から退場するお客さんが多く、広い会場は白けた雰囲気支配されていた。

5日間の公演をなんとか終わると、宗像三女神と持国天は新ユニット「鷹となすび」結成を発表。「ザ・ゴスミックス・弁天・バン

ド」は正式に解散した。

孤軍奮闘ライブをやりきった弁天だがさすがに痛々しく、一人無言で会場を去った。……いや、一人彼女に付き従う者がいた。マネージャーに抜擢された秘書その5である。ここまで来たら名前を付けるのも面倒だからこのまま行こう。

「弁天さん。新しいバックバンドはどうしましょう?」

「うるさいわねえ。もう音楽なんてどうでもいいわよ」

「どうしてもよくはないでしょう? 弁天さんは芸能の神様じゃないですか? 音楽捨ててどうするんです?」

「音楽やめる。ついでに神様もやめる。もうふつ々の女の子になる」

「じゃあ僕の奥さんに永久就職しませんか?」

「フツ……。それもいいかしら……」

「ああこりや相当重症ですねえー? ま、あなたが歌うことをやめるなんてできっこないんですから、ま、バンドのことは僕に任せてください。レコード会社のスタッフと相談して弁天さんの歌いやすいプロのミュージシャンを揃えますよ。なあに、人気なんてすぐに盛り返しますよ。ね?」

06 レッツ・スペンド・ナイト・トゥギャザー

持国天と宗像三女神のユニット「鷹となすび」は哀愁のメロディ「ホテル軽井沢」をアダルトコンテンポラリーのベスト10にチャートインするヒットを放ちじわじわ人気を獲得していった。

全国各地で神出鬼没のライブ活動を展開する「ザ・ロック・福神」も謎の覆面(?)バンドとしてハードロックファンの熱狂的人気を獲得していたが、そもそもハードロックファンの絶対数が少ないのでライブの盛り上がりの割には世間一般の反応は鈍く、チケット配布の商店街振興策としてはご当地B級グルメにはるかに及んでいないのが実際だった。

「ザ・ロック・福神」の人气が今ひとつお茶の間レベルに普及しないのはカラオケで歌えるようなキャッチーでポップなヒット曲がないからである。超美人であるが声が細く歌唱力も凡庸な女性ボーカルがウィークポイントである。

そして「ザ・ゴスミックス・弁天・バンド」を解散した弁天は実質的なソロプロジェクト、本名サラスバティーから取った「サーラ」名義で「負けないわ」を発表、逆境にめげない青春応援歌が就職難に苦しむ新卒者や就職浪人のハートをガッチリ掴んで大ヒットするミュー。ツクステ。ヨンに出演した弁天はへそ出しセクシーコス进行を封印した地味なりクルート狩衣で誠実なキャラクターを演じてすっかりお茶の間の人気を獲得した。

三者三様にそれぞれしつかりした活動でそれぞれの人気を得ていたが、招来された所期の目的である不況脱出を果たすには至らず、こっそり活動資金を出資している政府官房は苛立ちを募らせていた。政府内の極秘の仕分け会議に取り上げられ、「経済対効果が弱い」とやり玉に挙げられ、「なんとかオリ。ンの1位を取って……」と食いつかる官僚に対し与党女性議員は「1番じゃなくちゃ駄目なんで

すか？」と痛烈な批判をくわえた。『やっぱオンリー1よりナンバー1だよなあ……』と官房秘書は苦い思いをしたが女性議員が怖くて言い返せなかった。

仕分け会議の結果、七福神及びその周辺ユニットの活動への助成は1年間で打ち切られることが決定した。

そして1年が経とうという師走、12月半ばという微妙な時期に「スノーパーク音楽祭」という雪の雪像に囲まれ端で子どもたちが雪だるまを作っているような雪のお城の舞台でも行われる歌謡ショーのようなこれまた微妙な名称のイベントが行われることになったが、実態は札幌ドームにて行われる神様三バンドのジョイントコンサートである。現在三者はそれぞれ別の音楽スタイルで活動しているため「ロック」または「ポップ」と限定して名乗ることが出来ず、大晦日のカウントダウンライブという案もあったが、全国からのお客を当てにしているため荒天で交通機関が乱れる、宿の確保がたいへん、公務員は28日仕事納めが慣例で大晦日に仕事なんかしたくない、等の理由で地域振興という所期の目的はすっかり後退したやっつけイベントになってしまった。官公庁に七福神好景気計画の熱はすっかり冷め、民間イベント会社に丸投げされ、チケットはかなりの高額になったが、11月後半に入って急遽発表された割りにはチケットの売れ行きは良好であった。やはり弁天の「サーラ」の人氣が高いようで7割、あとの3割を「鷹となすび」「ザ・ロック・福神」が分け合う感じが。

収容人員5万の6割ほどが埋まって、「スノーパーク音楽祭」が始まった。

最初に登場したのは「鷹となすび」。ヒット曲「ホテル軽井沢」をメインに「お持ち帰り（テイク・イット・アウト）」「鳴らし物」「その他大勢（ワン・オブ・ゼイズ・ゴッド）」などを披露し、地

味ながら高い音楽性と演奏で会場の温度を温め、好評の内に出演を終えた。

次いでメインの「サーラ」が登場しファンの歓声に迎えられた。弁天以外のメンバーは衆生のプロミュージシャンで構成されている。紺のリクルート狩衣で登場し「負けないわ」を披露する弁天にファンは大喜びし、「祈る想い」「舞い踊ろう」とヒット曲を連続して大いに観客を沸かせた。

しかし客席の盛り上がりとは裏腹に弁天は今ひとつパフォーマンスに乗り切れていなかった。演奏を披露するのはテレビが主で、CDのプロモーションでインストアライブを何度かやっているが、カラオケか、シンセでリズムを流してキーボードやギターで弾き語りしており、こうしてバンドといっしょにコンサートを行うのはほぼ初めてのことで、練習嫌いの弁天はろくにリハーサルもしていなかった。バンドは一流プレーヤー揃いで、弁天の注文通りの歌いやすいバックミュージックに徹していた。それなのに歌いながら弁天はどうにも気分が乗らず、持ち歌の5曲を歌い終わると、アンコールを叫ぶ観客に対し予定の「ザ・ゴスミックス・弁天・バンド」の曲はやらずに自分のステージを終えてしまった。

取りの「ザ・ロック・福神」の演奏が始まった。

07 ザ・バトル・オブ・エバーモア

「ザ・ロック・福神」の演奏は相変わらずすごかった。観客の一部は多いに盛り上がった。だが激しすぎるパフォーマンスは客の大半を占める「サーラ」ファンには受けず、短かったサーラのステージにがっかりしながら席を立つ姿があちこちで見受けられ、手拍子を打ちながら下手くそな踊りを踊っていた吉祥天がようやく歌い出すとまるで歌になっていない歌に白けてぞろぞろ退出しだした。

そこへ苛立ちを爆発させた弁天が飛び入りして歌い出した。

ハードで分厚いドコドコ雷が転げ落ちるようなサウンドに負けないう図太い金属質の力強い超ハイトーンボーカルが突き抜け、出口に向かっていたサーラファンはびっくりして振り返った。会場は嵐のように盛り上がり、久しぶりに思い切りシャウトした弁天はすっかりノリノリで、リクルートスーツからへそ出しセクシーコスチュームにチェンジして思い切りロックに弾けたボーカル・ダンス・パフォーマンスを繰り広げた。サーラに癒しを求めていたファンも、最初啞然としていたが、やがて拳を振り上げてワーワーキャーキャー思い切り声を上げて楽しそうに大騒ぎした。

舞台袖で眼鏡の見習い僧と秘書その5は笑顔でガッチリ握手した。秘書その5は弁天が個人ユニットのサーラに満足できず、もっと有機的結びつきの強いバンドサウンドを求めているのを知っていた。目立ちたがり屋で我が儘で練習嫌いというバンドメンバーとしては困ったヤツながらロックンロールパフォーマーとしては最高のボーカーリストである弁天自身、本心ではバンドとしてやりたいと「ザ・七福神バンド」に未練を持っていたのだ。その未練があったから過去の確執がある両バンドとのジョイントコンサートにも参加したのだ。

弁天は水を得た魚のようにパフォーマンスをし、会場は総立ちで熱狂し盛り上がった。

予定のセトリリストを終えた後もアンコールは鳴りやまず、更に1時間延々と演奏し続け、バンドは力のすべてを出し尽くし、我を忘れて熱狂していた観客もぐったりして心から満足して満面の笑顔で万雷の拍手を送って最高の雰囲気コンサートを終わらせた。

この大成功でプロモーターは『これは行ける！』と興奮し、さっそく大晦日のカウントダウンライブと全国ドームツアーを計画した。

元気があれば何でも出来る！

日本の未来は明るいぞ！

三大神様バンドのジョイントコンサート全国ドーム巡りツアーが発表された。

その発表記者会見でバンド間のメンバー交代が発表された。弁天が「ザ・七福神バンド」に復帰することが正式に発表され、実質的に個人プロジェクトだった「サーラ」は楽曲ごと吉祥天に受け継がれ、「ビューティー・リッチ・アンド・ラック・シュッドウ・ミー」略して「ラクシュミー」へと新生され、メンバーは吉祥天をボーカルに、謎の黒子「ミス・スターレスナイト」をサウンドメイカーとするデユオである。後の話であるが線の細い吉祥天のウィスパークイーンとそれを生かす音響系のデジタルサウンドのおしゃれな楽曲は吉祥天のセレクトイヤーなルックスとキャラと共に大人気となり契約事務所には大金が転がり込むことになる。しかし、実はミス・スターレスナイトの正体は功德天である姉吉祥天と対を為す黒闇天、別名「世界終末の夜」黒耳（こくに）であり、常に姉の陰につきまとう妹は姉がバブリーに稼ぎまくった金をありとあらゆるアンラッキーで散財させるという貧乏神であったが、ま、それだけ世の経済を循環させることになり、これも世のため人のための神である。

「鷹となすび」も順調な活動を続け、宗像三女神は弁天と和解、良好な関係を築く。

「ザ・七福神バンド」は結局吉祥天が抜けて6人になってしまったが、せっかく弁天が戻ってめでたいと言うことでゴスペル調に声の出るバックボーカルとしてお多福を暫定サポートメンバーにくわえて七福神体制を保つ。声も出てダンスも得意のお多福はバンドにコミカルな風味を持ち込み楽曲の幅を広げること貢献する。楽器主体のテクニカルに走りすぎる嫌いのあったバンドは昨今隆盛を極めるアニソンを参考にパワフルなボーカルを生かしたハードでありつつポップで壮大な、カラオケでも歌える楽曲で一般にもファン層を広げることに成功する。もっともこれは従来のハードロックファンにはイマイチ不評で痛しかゆしではあるが、まあ、元々弁天のために始めたバンド活動の一つの理想の形と言えるだろう。

こうして全国ドームツアーは成功していき、忙しいスケジュールの間に制作されたそれぞれのアルバムのセールスも好調で、おめたいバンドグッズも売れまくり、テレビに出演しては楽しくお茶の間を明るくし、かくしてどん底に喘いだ日本経済に回復の兆しが見え始めた。七福神を招来した政府の決断もようやく実を結んだと見て良いだろう。

201X年正月、めでたしめでたし。

と思いきや、

朝鮮半島からは非常にパフォーマンスキルの高い男芸能神集団「東方神技」が来訪して多くの日本人女性のハートを鷲掴みにし、第二陣としてこれまたヘルシーでセクシーな美脚を見せつける女芸

能神集団「神羅」「女神時代」が相次いで来日しその完成された美と圧倒的なパフォーマンスで日本中に旋風を巻き起こし、本邦の神々の脅威となった。

さらに、

大陸より「八仙楽神」と名乗る男神七人女神一人の神（仙人）集団が来日してパフォーマンスしたが、その楽曲は「ザ・七福神バンド」の丸パクリであった。その抗議に対して「八仙楽神」側は

「そもそも福の神として我々がオリジナルであり、日本の七福神こそ我々八仙人のコピーであり、不当にキャラクターを使用している七福神は我々に権利料と損害賠償金を支払う義務がある」

とまったく盗人猛々しい。本当に困った国である。

「ザ・七福神バンド」はパワフルなライブ活動を続けていく。「鷹となすび」も「ラクシュミー」も自分たちのフィールドでオリジナルの活動を続けていく。

本物のパフォーマンスは必ずや聴衆の心を掴み震わせ、皆に善良なパワーを与えていくだろう。

行け！七福神！

雷鳴のごときパフォーマンスで我々の心を天上へ昇華させてくれ！

そして、戦いは続く。

おしまい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8743p/>

ヘヴィーメタル七福神

2011年1月8日10時03分発行